

## 習志野市ALT紹介2 コルビー・スミスさん

# 子どものころから日本に引きつけられて

姉妹都市タスカルーサから習志野市に派遣されているALT（外国語指導助手）は現在3名。そのリーダーを務めるのがコルビー・スミスさん。昨年8月に来日、これまで市内公立中学校の全7校を回りました。

「どの学校の生徒も皆いい子たちですが、各学校それぞれの個性があります。六中は大変真面目。勉強熱心で、一回言われたことはすぐやってくれます。四中と七中はとっても元気で陽気。遠くからでも“ハアーイ！”と大きな声で挨拶してくれます。二中と五中は静かで優しい。一中はその中間くらいでしょうか。三中はリラックスしたムード。挨拶もにこにこしながら“ハ～イ”と柔らか。少しずつ異なるのが面白いですね。どの学校でも、教えることは本当に楽しいです」

リーダーは、ALTと教育委員会とのコミュニケーションをはかったり、後輩ALTをトレーニングする役目を担っています。また、1年間に全ての学校を回らなければならないので、他のALTが1校に7、8週間いるのに対し5週間くらいしかいられません。

「できればもう少し、各学校に長くいたいですね。生徒たちと関係を築けたと思える頃、他校に移らなければならないので……」と、残念がります。

アラバマ大学で国際関係を専攻。副専攻として日本語も。一緒に来日した夫のデリルさんとは、大学時代に日本語のクラスで出会いました。

「二人とも日本に興味があったので、私が日本に行くことが決まった時、ごく自然に彼も行く気に（笑）」

現在、英会話サークルなどで英語を教えているデリルさん。NIAのイベントにも、二

人一緒に積極的に参加・協力して下さっています。

そもそも日本の何がコルビーさんの心を引きつけたのでしょうか？

「カルチャーです。日本の人々

は周囲にとっても気を配ります。周りの人々とのコミュニケーションだけでなく、取り巻く環境や自然、自分を取り巻く全ての事柄を意識し、気を配ります。たとえばゴミの出し方一つにしても、アメリカではリサイクル・システムをとっていない市も多いのですが、日本ではリサイクルの意識がもっと高いです。そういう考え方、生き方、暮らしの姿勢が、私は好きなんです。」

実はコルビーさん、お父さんの仕事の関係で、生後3カ月で来日。青森県三沢に4年間暮らしたことがあり、今でも十和田湖やねぶた祭りを覚えているそうです。

「日本が外国、という意識はなかったです。子どもの私にとって、初めての世界が日本でしたから。以来、日本はずっと私を引きつけているのです（笑）」

今後の抱負は、「生徒たちとより強い絆を作っていきたいです。それと、後から来るALTのためによい土台を作っていきたいですね」と、ニッコリ。コルビーさんの今後にますます期待！です。

（インタビュー 佐藤洋子／広報青年部会）



コルビー・スミスさん